

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成30年は11万7千トンとなりました。

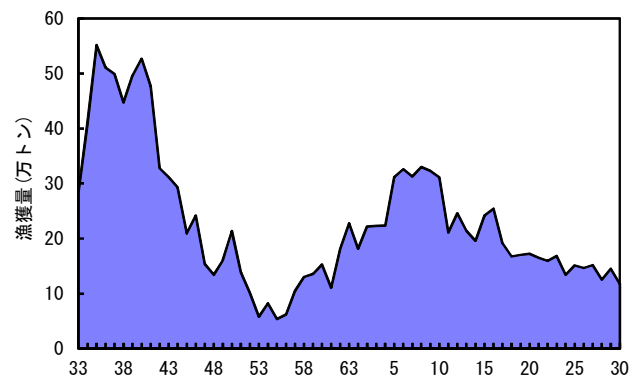


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、7、8月に串木野沖、阿久根沖、縄瀬でマアジ小、仔、豆（0～1歳魚：2019～2020年生まれ）主体に漁場が形成されました。9月に縄瀬でマアジ仔、小（0～1歳魚：2019～2020年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では、8、9月に野間池でマアジ仔、小（0～1歳魚：2019～2020年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で208トンの水揚げで、前年の83%及び平年の26%でした。

3. 県内の令和2（2020）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：マアジ小、豆（0～1歳魚：2019～2020年生まれ）

来遊量：前年並で平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期もマアジの0～1歳魚が漁獲の主体となることが予測されることから、前年並で平年を下回ると考えられます。

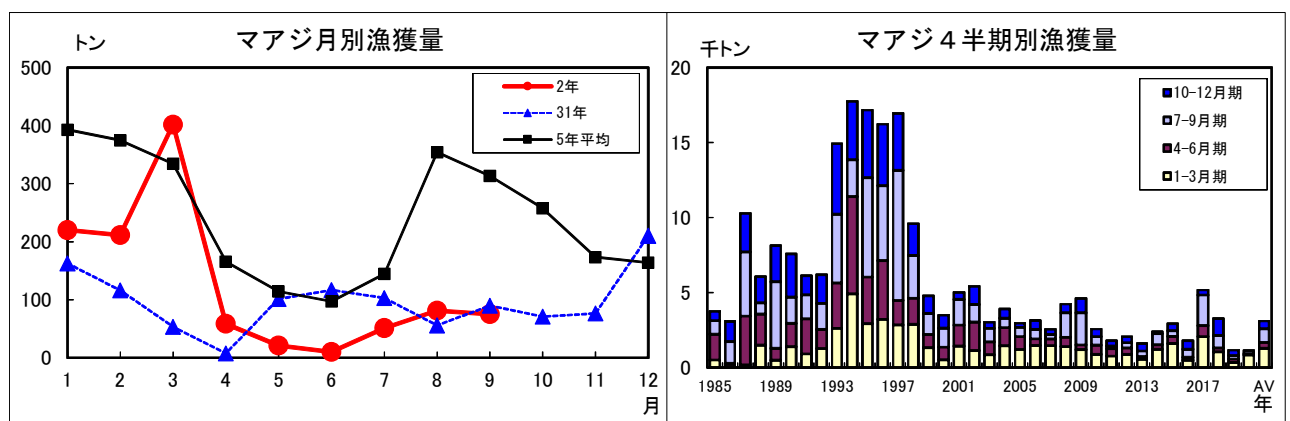


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年9月23日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成30年は54万1千トンとなりました。

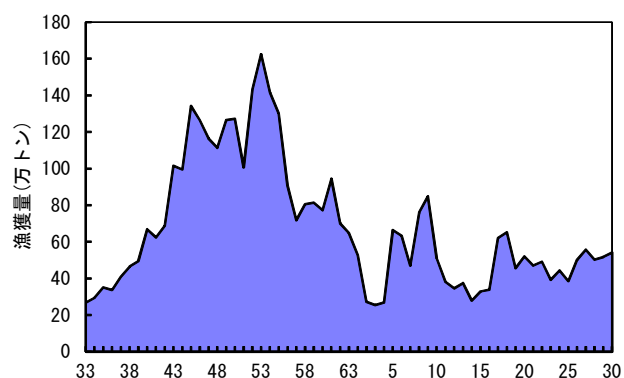


図 全国のサバ類漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、7、8月に野間池沖、串木野沖でサバ類豆、小（0～2歳魚：2018～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。9月に縄瀬、甑西でサバ類豆、小（0～2歳魚：2018～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、期間を通じて馬毛島でゴマサバ中（3～6歳魚：2014～2017年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で1,571トンの水揚げで、前年の61%及び平年の38%でした。

3. 県内の令和2（2020）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ小、中小（1～4歳魚：2016～2019年生まれ）

来遊量：前年、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は、前期に加入した当歳魚を含むゴマサバの若齢魚が主体となります。前期（7～9月）と今期（10～12月）の漁獲量には正の相関があり、これをもとに予測すると、前期に引き続き前年、平年を下回り低調に推移すると考えられます。

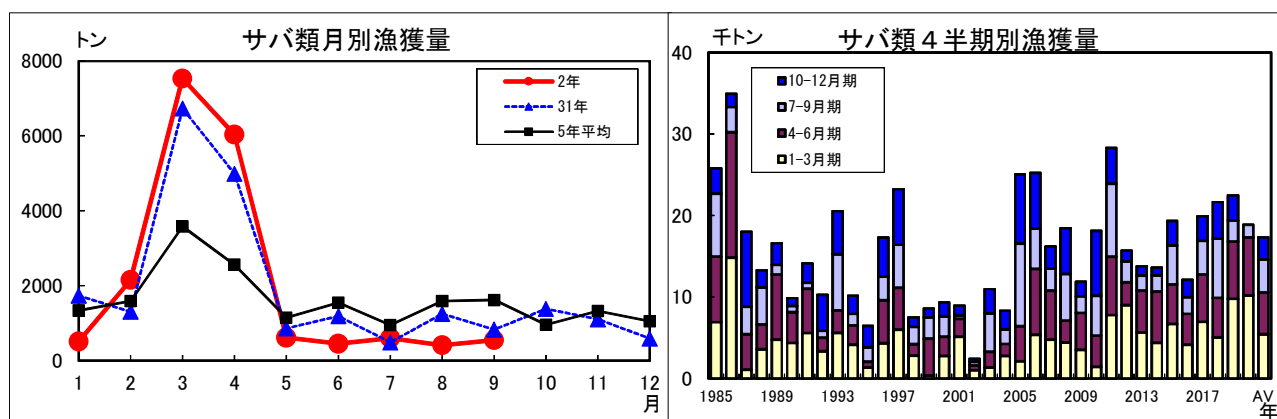


図 サバ類まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年9月23日までの水揚げ量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14～22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成30年には52万トンとなりました。

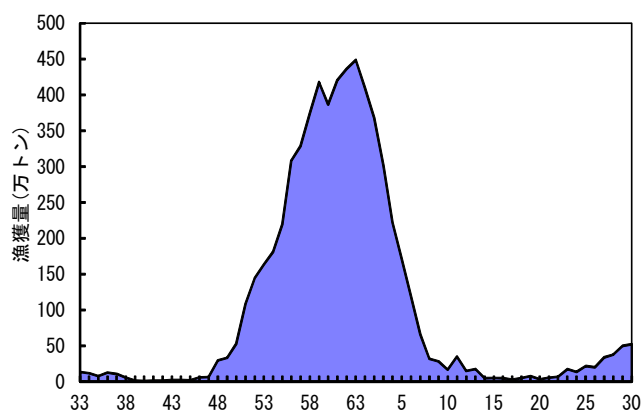


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、8月に天草沖、9月に甕島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、9月に黒島、硫黄島沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期を通じて小～中羽（0歳魚：2020年生まれ）主体に1,160トンの水揚げで平年の198%でした。（前年はまとまった水揚げがなかったため比較できず）

北薩海域の棒受網では、24トンの水揚げで平年の36%でした。（前年はまとまった水揚げがなかったため比較できず）

3. 県内の令和2（2020）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：中羽（0歳魚：2020年生まれ）

来遊量：低調であった前年、平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期も漁獲の主体となる中羽（0歳魚：2020年生まれ）は、前期に前年・平年を上回って推移したことから低調だった前年、平年を上回ると考えられます。

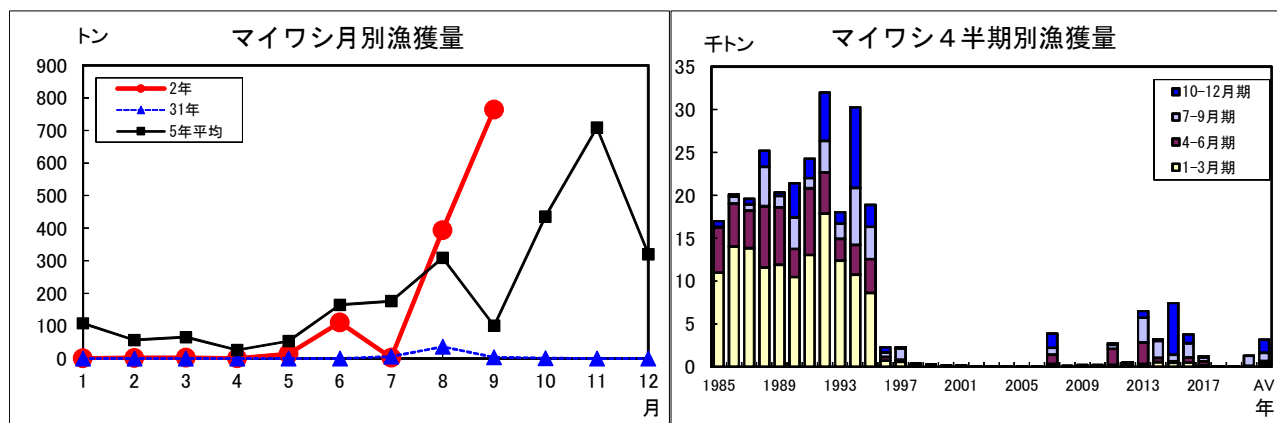


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年9月23日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となりましたが、平成30年は5万4千トンと大きく減少しました。

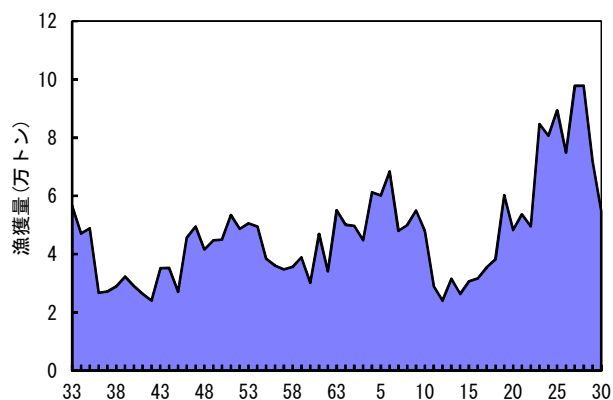


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、8月に天草沖、9月に甕島周辺、縄瀬で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、7、8月に枕崎沖、9月に黒島、硫黄島沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期を通じて小～中羽（0歳魚：2020年生まれ）主体に631トンの水揚げで、前年の29％、平年の45％でした。

北薩海域の棒受網では、643トンの水揚げで、前年の72％、平年の60％でした。

3. 県内の令和2（2020）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽主体（0歳魚：2020年生まれ）

来遊量：前年，平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期も漁獲の主体となる中～大羽（0歳魚：2020年生まれ）は、前期に前年，平年を下回って推移したことから、今期も前年，平年を下回ると考えられます。

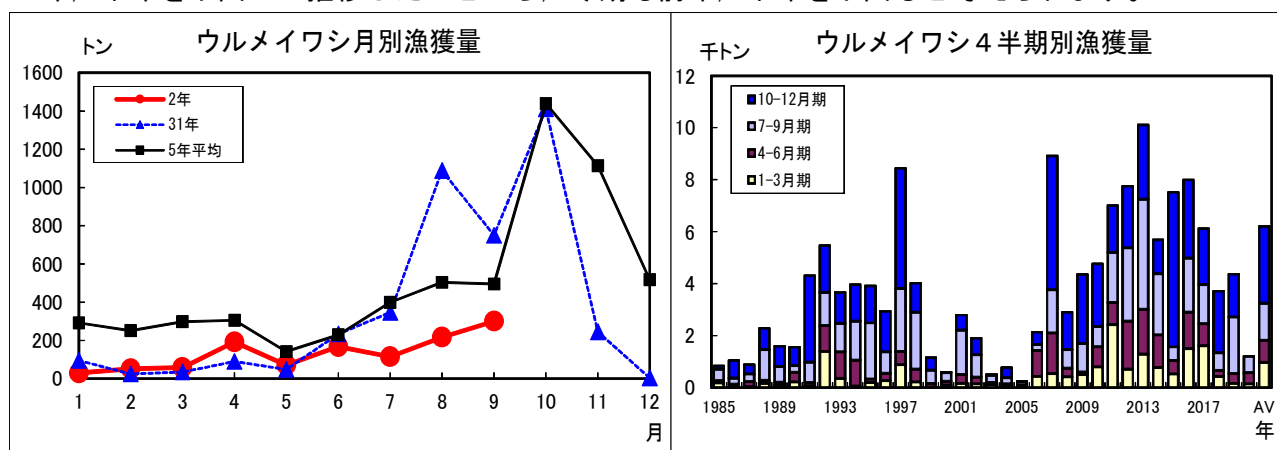


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和2（2020）年9月23日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成30年は11万1千トンとなりました。

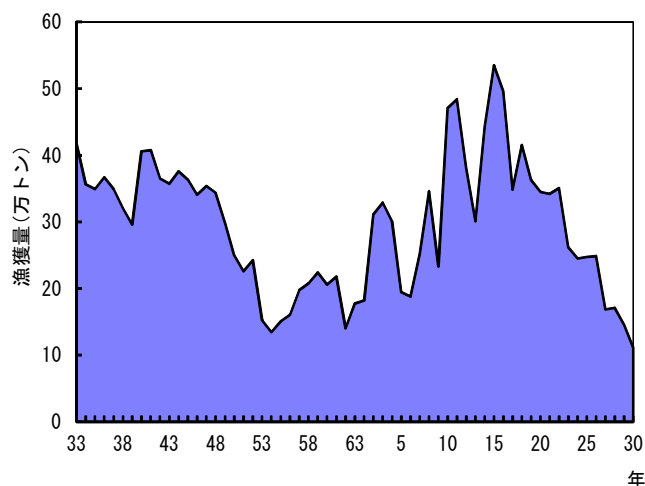


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、8月に天草沖、9月に甑島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、9月に黒島、鷹島、硫黄島沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、大羽（1歳魚：2019年生まれ）主体に518トンの水揚げで、前年の69%、平年の38%でした。

北薩海域の棒受網では、214トンの水揚げで、前年の195%、平年の116%でした。

3. 県内の令和2（2020）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：大羽（1歳魚：2019年生まれ）主体に、小羽（0歳魚：2020年生まれ）が混じる
来遊量：非常に低調だった前年を上回り、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期の漁獲の主体となる大羽（1歳魚：2019年生まれ）の前期の漁獲量は前年、平年を下回っているものの、9月にまとまった漁獲があったことから、非常に低調だった前年を上回り、平年を下回ると考えられます。

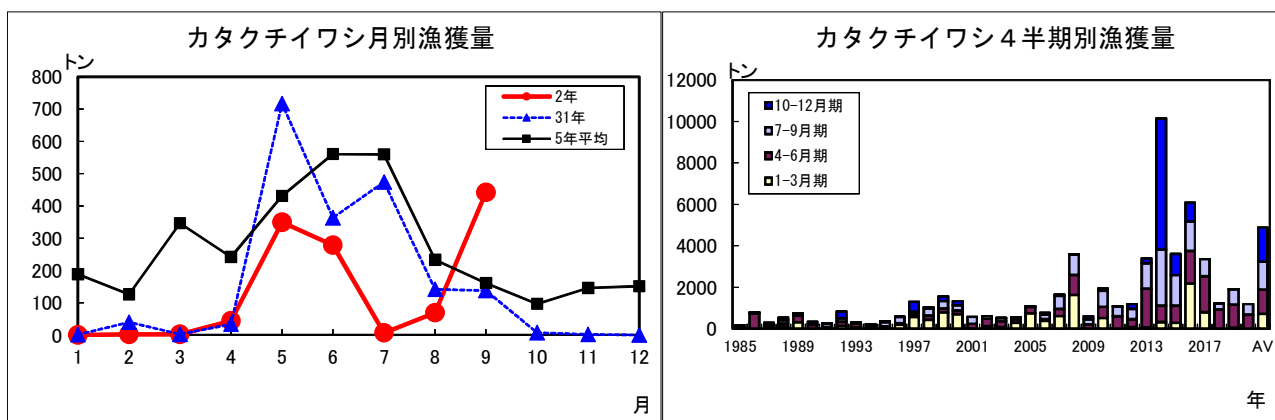


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和2（2020）年9月23日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

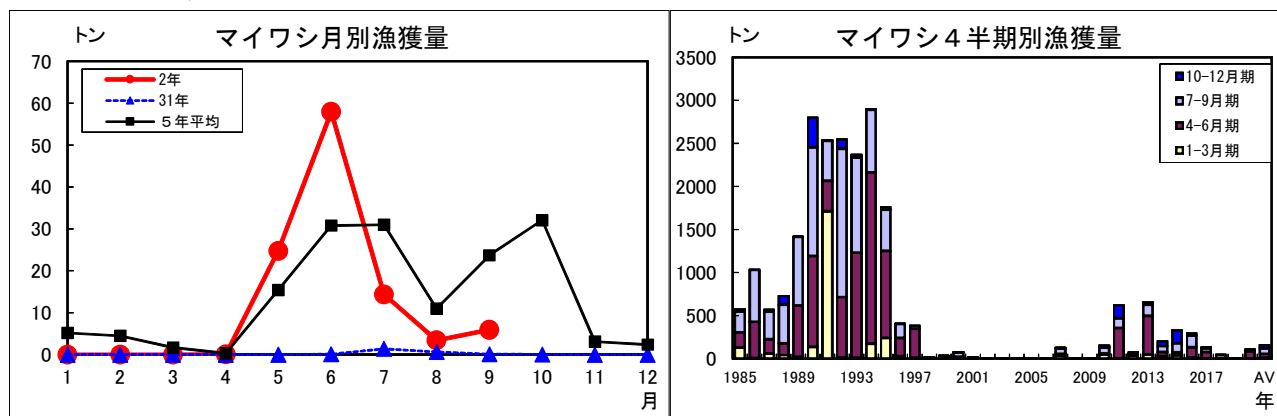


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

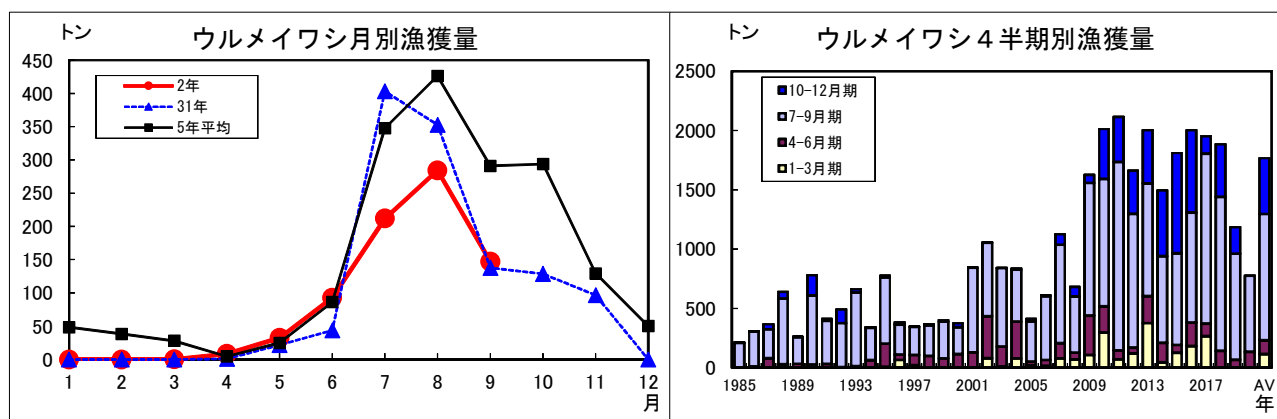


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

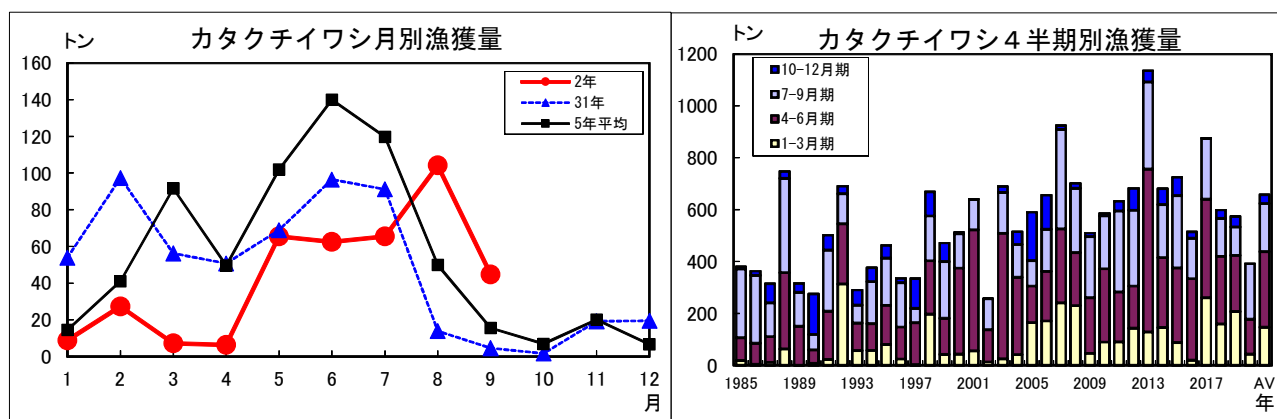


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 令和2(2020)年9月23日までの水揚量を使用

[ムロアジ類（参考：漁況経過のみ記載）]

〈クサヤモロ、モロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和2（2020）年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから5,000トンの間での推移しており、令和元年は3,627トンとなりました。

4港計のまき網では、島間沖、宇治、口之島、種子島南でクサヤモロ小、中小主体の漁場が形成されました。期全体で277トンの水揚げで、前年の94％及び平年の64％でした。

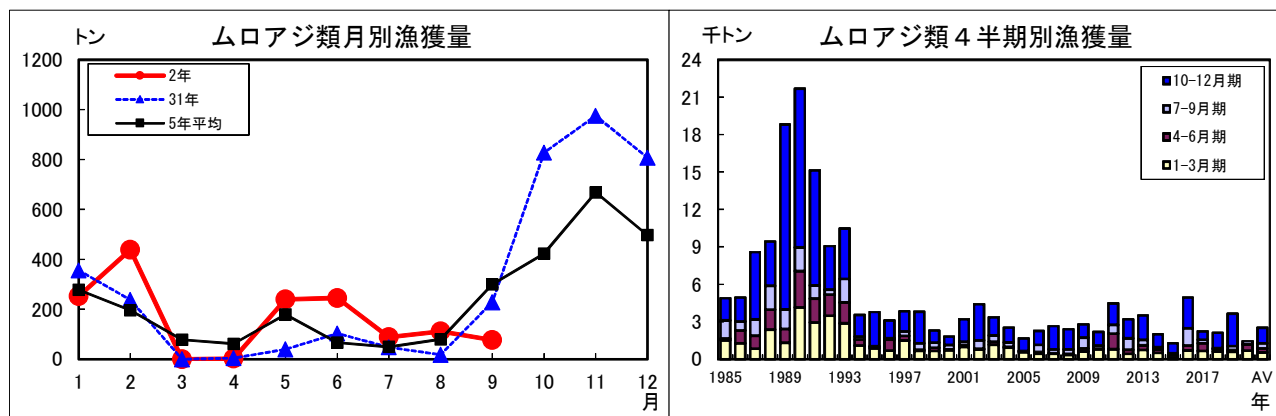


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年9月23日までの水揚げ量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和2（2020）年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが、令和元年は1,211トンとなりました。

4港計のまき網では、主に屋久島南でオアカムロ中小主体の漁場が形成されました。期全体で180トンの水揚げで、前年の145％及び平年の102％でした。

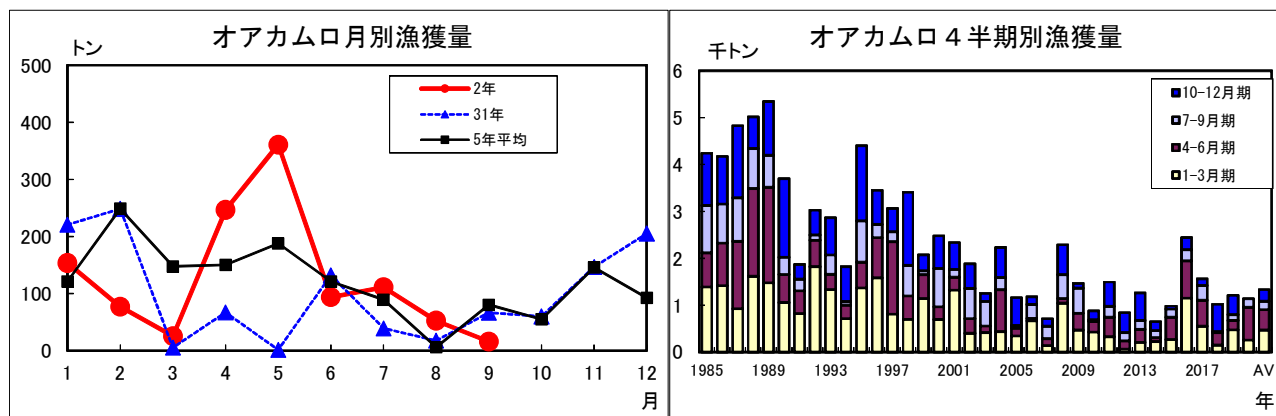


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年9月23日までの水揚げ量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

県内の令和 2（2020）年 7～9 月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが、平成 16 年以降は低調に推移し、令和元年は 361 トンとなりました。

4 港計のまき網では、八代海沖、東町沖でマルアジ大、小主体の漁場が形成されました。期全体で 69 トンの水揚げで、前年の 257 %及び平年の 120 %でした。

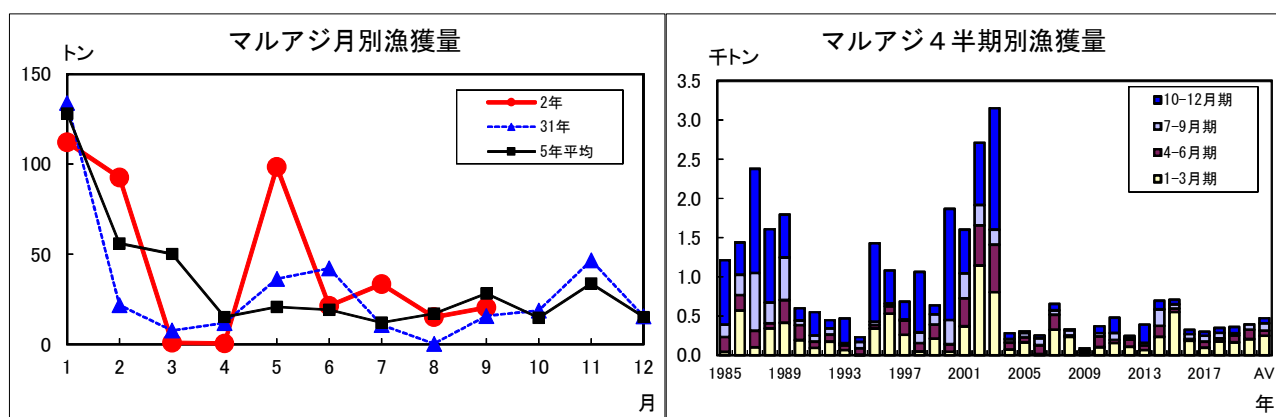


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，令和 2（2020）年 9 月 23 日までの水揚げ量を使用